

人形劇団『細川』 前編

今日 あした

穂高温泉から待ち合わせをしている礫山美術館までの道は緩やかな坂をただ下るだけである。

十月も終わろうとしているのに平年より気温が高く、コートも宿に置いたままで歩きだし林を抜けると、刈り取りの終わった畑が視界いっぱいに広がった。

目の端に赤い葉が揺れる。

ななかまどだ。裸になった木の枝に真っ赤な葉が四、五枚、今にも落ちそうにへばりついている。

その上に、雲ひとつない青空がある。

歩を進めると足元の畑のわきで猫じゃらしは蝦茶色に色付き、光を浴びたスキは白金色の穂を豊かにそよがせる。

赤まんまは桃色の粒々の細長い花をかわいらしくつけ、畑に残ったこぶのような茎の残骸の傍らに、もう若い緑の雑草が逞しく生え出している。

こんな眺めは四〇年前の記憶と大して変わらない？

いやいや、現在は、アスファルトの広い道が出来、車も頻繁に通っているではないか。

礫山美術館に着くと、厚手の綾織りのスーツに、カシミヤのショールをふわりと肩にかけて初老の婦人がベンチに腰を下ろし、美術館のはるか北側に広がる山を眺めていた。

この人かしら、遠くから回り込むようにして彼女の斜め前に出て首をかしげながらおずおずと、

「秦淑江さんですか」、と声をかけた。

彼女はゆっくりと私の方に顔を向けて立ち上がると

「まあ、星さん、星千明さん」、語尾を心持あげてから、確信をもったように、

「あの頃とちっともお変わりになっただけじゃないわ。急に電話をしてびっくりなされたでしょう」

にこやかに手を差し出して、私の手を包み込むように両手で握り、懐かしそうに言った。

あまりに変わってしまった、秦淑江さんの流暢な身のこなし。

それに引きかえ、とつくりのセーターとジーンズの下、スニーカー姿の私は、自分ではいつまでも若い気であるが同じ年のはずだ、とひるみながらも、つくり笑いで淑江さんの顔をじいっと見たら、そこに昔の彼女の面影が重なってきた。

「秦さんも、キラキラ光る眼やふっくらとしたエキゾチックな雰囲気、ちつとも変っていないわ」

数日前、彼女から電話があった。

「秦淑江でございます。人形劇団で御一緒でした……」

何年ぶりだろう、声を聞くのは。

毎年クリスマスカードが来て、私は新年のあいさつを絵ハガキで送って、細々と交信は続いていた。

お会いしませんか。という誘いだった。

祖父母の墓の始末をしに来たそうだ。日本に来るのは今回が最後だろうということだった。

「出来たら穂高の碌山美術館でお会いしたいわ」

答えるまでの数秒間に、四〇年前の記憶が、セピア色のアルバムを繰るように頭の中を去来した。

「是非！」

あの頃は柵などなかったのに……碌山美術館は、小さな三角屋根のつぺんに十字架のある教会の建物だった。その入り口で入館料を払い、ただ荻原守衛の作品を鑑賞するところだったのに……

私達は、挨拶するよりも先にそんなことを言いながら、二人とも同じことを考えていた。

「隣に小学校の校庭があったはず」遮るものはなかったはずなのに、資料館が建ち、柵も出来ている。

入り口の係員に断って、外に出て隣の小学校に行くと、建物は近代的になっても、北アルプスを一望できる校庭は白い砂混じりで広々として、かつて旅公演の帰りに立ち寄った、大空まで広がる情景がそのままに残っていた。

陽だまりで畳の上に広げた新聞の求人案内を見ていたら、人形劇団・細川 とあった。

劇団のようなマニアックなものも求人案内で人を集めるのかな。二十五才の私は短大を卒業した後、洋裁学校に通いながら家事手伝いと称して家でぶらぶらしていた。

いわゆる今で言うパラサイトシングルだが、一九七〇年代当時はそれほど奇異なことではなかった。

「ねえお母さん、求人案内で人形劇団員を募集しているのよ」  
さつきからタンスの引き出しを開けたり閉めたりしている母に言う  
と、

「そう、そう言えばしおりの通っている幼稚園にも人形劇が来るって言うっていたねえ」

しおりは姉の娘だが、私もそんな話を聞いたので人形劇団が目に残まったのかもしれない。

「行ってみようかしら」  
「そうね……」

上機嫌で上の空の返事が返ってくる。

母は、元来神経質な口うるさい人で、兄にも姉にも箸の上げ下ろしにまでがみがみ言い、煙たがられている。

すぐ上の姉などは、早くそんな母のもとを離れたくて、早々と結婚して、私とは三歳しか年が離れていないのに、もう幼稚園生のしおりの母になっている。

それなのに未っ子の私にだけは何でも好きなことをさせてあげたいと思うらしい。

好きなことが出来なかった姉が母に抗議したら

「千明は何をするときも楽しそうだから反対する気にならないのよ」、  
と言われたそうだが、母は上の二人にエネルギーを使い果たしたので、私のことはどうでもよくなったのだと私なりに思っている。

そんな母も、近頃は見合いの話を次々に持つてきていたが、私も二〇回目にしてやっと婚約の運びとなったのだ。

相手の木下さんは、背が高く痩せていて、第一印象で益田キートンにそっくりだと思った。会うたびにますますそう確信する。

覇気はないがひょうひょうとしているところが良い。

彼には両親と嫁に行った姉さんがいる。父親は気難しそうだが、母娘は女学生みたいに身を寄せ合うように喋ったり笑ったりする。

彼の母親に至ってはまだ婚約する前から私のために手芸用品店の講習に通ってセーターを編んでくれるような人なのだ。

母が私の嫁入りの準備で持ち物を点検している横で、私は人形劇団に電話をして面接の日取りを決めた。

「明日来て下さいって」

「どこに行くの」

やっぱり聞いていない。

「幹線道路を右に曲がった細い路地を五百メートルほど行くと、鉄道の高架橋にぶつかる。その手前の左側の家です」。

電話で聞いた通りに行くと、確かに石の門柱には小さく「人形劇団細田」と書いてはあるが、瓦屋根の二階家は、どう見ても個人の屋敷にしか見えない。

門から続く、庭との境に植えられた生垣の脇の飛び石伝いに玄関に行き、硝子格子の引き戸を、がらがらと開けて「ごめん下さい」と言ったら、玄関脇の、ドアが開いている部屋から

「どうぞ入ってください」、と男の声が返って来た。

床も玄関も埃っぽく、積み重なった雑誌や印刷物、風呂敷にくるまつた大小の荷物が、いくつも置いてある。

靴を脱いで、つま先歩きで中を窺うと、八畳ほどの洋室の中央には勉強机が二つ並んでいて、さらに奥の、窓に向かった机で声の主とおぼしき男が、白いワイシャツ姿で書き物をしていて、椅子の背にはグレーの上着が掛っている。

机の上にも部屋の隅にも物が氾濫していて、

「入ってください」と言われても……、と躊躇していると、男はくるりとこちらに顔を向けて立ち上がり眼鏡を少し持ち上げて私を見ると、勉強机のわきの椅子を手の平で指して「どうぞ」と言った。その風采の上がない男にちよつと頭を下げて座ると彼は名刺を出して、

「平です。この劇団の事務をしています。電話をいただいた星千明さんですな」と言うときそれ以上何も聞かず、用意するようになつたので差し出した履歴書も脇によけて、机の上に劇団のパンフレットを広げ、

説明を始めた。

「人形劇団・細川 には、旅班と東京班がありましたね、旅班は地方の小学校で人形劇を公演しながら旅をしています。東京班は、人形制作、近隣の幼稚園での公演、テレビ出演などをします」

私は説明を聞きながら、人形劇というものに何の予備知識もなく、新聞の求人案内を見ただけで、ちよつと見学するような軽い気持ちで来てしまつて良かったのだろうか、と思ひ始めた。パンフレットには演じている人形が大写しになっていて、同じ場面を身近に見ている自分が不思議で、場違いなところにいるようで、だんだん不安になってきた。

平さんは一通り説明し終わると、急に及び腰になってしまった私に、「百聞は一見に如かずですよ」、と言ひながら、仕事場兼練習場に案内した。

そこは先刻、門から入つて脇を通つた生垣の向こう側の庭に建っている、二十畳ほどのプレハブで、母屋の縁側から一旦外に出て入るようになってゐる。

中には二か所に出入口があり、窓も付いているが足を踏み入れた途端、もわつと暑く、首筋や腕がいつべんに汗ばんでくる。目が慣れると天井からはものが垂れ下がり、色とりどりの板が何枚もあり、パイプの鉄棒のようなものに、得体の知れない布のかたまりが、たくさん掛つてゐる。何人か人もゐるようだ。

平さんが手招きすると、男女三人が立ちあがった。

「東京班の秦淑江さんと臼田京子さん、山田真人君です。こちらが面接に来られた星千明さんです」

平さんは、

「秦さん」と手招きして、次に私の方を見て

「彼女は入団三年目であなたと同じ年です」と紹介し、

彼女に何でも聞くように、と言うと事務室の方に行つてしまった。

秦淑江さんは少し太めだが、濡れたようなキラキラした目の、背の高いきれいな人だ。

ストレートのロングヘアを後ろで束ねて、ボロボロ、ピチピチのジーンズに、だいぶ年季の入つたインド綿のブラウスを着ている。

私が周りを見回していると、彼女は布のかたまりがいくつもぶら下がつてゐる中の、ひとかたまりを手を取つた。

それは兎の人形で、胴体が長く中心に棒が入っていて、両手の先にはピアノ線が付いていた。

秦さんは、中心の棒を左手で支えながらピアノ線を右手で操作して、兎の右手を前面で大きく回してからその手を胸に当て、思い入れたっぷりに私に向かって深々とお辞儀をさせて見せた。

不思議の国のアリスにでも出てきそうな、兎のひょうきんな仕草に、私は思わず笑ってしまった。

秦さんは次々に人形に手を入れ、あなたも持ってみる？ と私にも持たせた。

「これは白雪姫で使うのよ」とベニヤ板指して言うと、その近くにいた白田さんがベニヤ板の後に廻って動かしした。

すると板に描かれた七人の小人は一斉に右に左にと動きだした。

白田京子さんは、ショートカットで、女性なのに身のこなしなど、少年のようだ。

それに引きかえ、山田真人君はストレートの長髪、色白で、本物の美少年。肩が衣紋掛のように張っていて、少しかがんだらお尻が見えてしまいそうな股上の短いズボンをはいていた。

事務所に戻った時にはずいぶん時間が経過していた。

「興味があつたら見習いで入ったらどうですか」

平さんは先ほどとは別人のように、にこにこしながら、どうぞ掛けてください、と椅子を指した。

見習い期間は月給三千円ですが、交通費は出ますよ。通勤は……と言いながら私の履歴書を見て、あなたの場合近距離なのでバス代は出ませんが、仕事で移動のときにはその都度支払います。と言いながら履歴書を目で追って、

「趣味で童話を書いている、とありますね」、と顔を上げて私を見た。

「姪に自分で作ったお話をしているのですが、それを書きとめている程度です」

「そうですか、こちらでも幼稚園に行った時など、公演の前にお話をするのですよ。」

時々、以前この劇団にいた童話作家が来ましてね、自分の作品を園児の前で話して反応を見えていますよ」

そんな本格的に書こうなんて思ったこともなかったのに、見習いで月

に三千円しか貰えなくても童話を書くのに役に立つかもしれない、などと理由を付けて自分に言い訳しながらもまだ迷っていた。

父の扶養家族だという立場は変わらない。母は何と言うだろう。ちなみに当時、デパートのアルバイトの時給が八百円だった。

母に劇団の様子を散々話してから、入ろうかな、と言うと、なんの抵抗もなく母は「楽しそうね」と言い、私は通うことに決めた。

時々旅班の人が顔を出すようになると状況も読めてきた。

新聞広告で募集したのは、公演の合間に人形や小道具、背景などを急いで修理や製作するのに、早急に人手が必要だったのだ。

今回の募集で入団したのは私一人だった。

面接をした平さんは事務だけの人で、一カ月の半分くらいは地方の小学校や近隣の幼稚園、テレビ局などで営業をしている。

団長の細川さんは、細面の美男子で口数が少なく、翳のあるインテリといった雰囲気のある、魅力的な人だ。

その人が人形劇の製作、演出、公演それにテレビの仕事も全部こなしていた。そもそもここは細川さんの家で、彼の家族もここに住んでいる。

その日は、旅班の慰労と私の入団祝いを兼ねて細川さんが御馳走してくれることになり、細川さん、平さん、それに、旅班と東京班の総勢十一名が玄関わきの八畳の事務室に集まった。

真ん中にある勉強机の上のものをどかせ、周りに積み重ねて置いてあったこまごました物は、部屋の隅や廊下に押しやり、寄せ集めの椅子や台を並べ、全員がkarouうじて座った。

私は慰労と歓迎の会なので、縁側に面した細川さんの住居が会場なのかなどと思い、新調したばかりの水色のワンピースを着て行ったのだが、平さんだけが背広姿で、後の人は皆、くたびれたTシャツにジーパン姿だった。

机の真ん中にはガスコンロが置かれ、鉄鍋に油を入れて、細川さんが立ち上がり、彼が採ってきた山菜や、用意した魚や野菜に衣をつけて揚げ始めた。

いつもこんな具合なのか、接待をする細川さんも、される人たちも、慣れたもので、揚げたての熱々の天ぷらを、美味しい、美味しいと言い

ながら食べていた。

私は「旅班」の人たちに興味津々だった。

総勢五人は一台のライトバンに（荷物と人が乗れる限界だそうだ）男子二名女子三名が乗り、旅から帰ってきた時、私も出迎えた。誰もがスリムできびきびと余計なことを言わず黙々と荷物を下ろしていたが、終わるときさっさと帰ってしまった。それから時々顔を出すですがすぐにいなくなるので、ほとんど初対面に等しい。

揚げものが一段落するのを待って、平さんが自己紹介をするように言ったので、あらかじめ考えていた通り、

「星千明です。家事手伝いをしています。長所は好奇心が旺盛なところで、短所は好奇心があまりすぎるところです。趣味は童話を書くことです。どうぞよろしくお願いします」

と読み上げるように言ったら

「書いた童話は活字になったの？」と声がかかった。

みんな食べるのに忙しく、折り重なるように座っていて、手だけがぬつと出てきたり、食べ物や飲みものが頭の上を横切ったりするから、誰も聞いていないのではないかと思っていたので、びっくりして

「いえ、ただ書いているだけです」と小声で答えた。

途中で細川さんはガスコンロや鍋を片づけ、かわりに漬物や、するめなどを持ってきた。みんな食べ物をつまみながら飲みながら勝手に喋っている。

旅班には二〇代の夫婦がひと組いて、奥さんの美紀さんは妊娠していて暗い表情で少し膨らんだお腹に手を当てながら

「次の旅公演にはもう行かれないって、細川さんに言ってくれた？」と、小声で旦那さんの西さんに聞いている。

彼は元タクシーの運転手で、旅班の運転手兼大道具係なのだが、ことは深刻らしい。

「次の公演には、自分だけが行って、美紀は東京班で製作が出来るように頼んでみたがどうなるかわからない」、とぼそぼそと話していた。

一番賑やかだったのが羽田さんという大きな男性。パーマをかけたロングヘヤーでキリストみたいだ。

細川さんや平さんに、旅班の地方巡業の様子を陽気に話している。美大出で学生運動なども派手にやっていたらしい。早速、私のことをプチ

ブルと呼んで面白がっていた。当時はノンポリ、プチブルなどの言葉がはやっていて学生運動も盛んだった。

私も主義主張など何もないくせに大がかりのデモがあると聞いて代々木公園まで行ったら、人・人・人で、どこがどうなっているのか分からず茫然と立っていたら、こっちこっちと手招きされ、いつの間にか、ベ平連のデモ隊の中で行進していたことがあったけど、あの好奇心は長所かな短所かなと、変なところで思い出してしまった。

女性の尾畑さんと町田さんともに長い髪を尾畑さんは高い位置で、町田さんは低い位置できりと結び、無口でスリムでもかっこいい二人とも隅っこに置いた長い台に膝を抱くようにして座り、タバコを吸いながら、黙々と食べ、且つ飲んでいた。

後に、誘われて町田さんのアパートに行ったことがある。六畳の部屋に一畳もあるベニヤ板の彫りかけの版画が置いてあり、それを立てかけてから寝るのと言っていた。何でも美大の大学院に籍があるそうだ。暑い日で、狭い隙間に二人で座って昼食にと豆腐屋からボールに入れて買って来た豆腐を皿に移し、醤油をおとして冷や奴で食べたのは、不思議な体験だった。

東京班の三人も、それぞれがお互いの内情を知っているようで、身近なことを話していた。

私は劇団では芸術論なんかをするのかと漠然と思っていたのだが…。

旅班は、ロシアの民話『イワンのばか』を持って地方を巡業している。平さんが注文を取った地域の小学校何校かで公演をし、終わると離れた地域に移動していくが、間隔が開く時にはいったん東京に帰ってくる。

当時は高度経済成長真っ盛りで、どこの学校も立派な体育館を競って建てていたので需要があるのだと言っていた。

夏休みになり旅班が長期の休みになったので、細川さんは、十体以上の人形を事務所の二つの机の上に並べて傷み具合を検分している。私がじろじろ見ていると、細川さんがこれが悪魔だと言ったので持ってみた。他より断然大きく一メートル位あり目鼻立ちもおどろおどろしく出来ていてとても重い。

手は衣装の袖の先に手袋が付いているので右手を入れてみると人形の顔より大きくなった。左手で棒を持ち、右手を開いたり、げんこつに

したり指さしたりしたら、なかなか悪魔らしい。からくりを動かすと、太いまゆ毛が目じりの方で上下して、それに口を開閉させてみたら一層凄味が出てきた。

他の人形も手にとって、手足を動かしている内に、面接の日に玄関前に風呂敷にくるまれて置いてあったものの正体がわかった。

一体一体の作りかけの人形と、それに付随するものを一まとめにしてあったのだ。

細川さんは新調するものと修理するものを決めてしまうと、その日のうちに秦さんと買い出しに行くというので、私もついて行くことにした。

浅草橋は初めてだったが、舞台衣装などを売る店が軒を連ねている。

どの店のショーウインドーにも派手なショッキングピンクや目がちかちかするような蛍光色の薄緑のドレス、原色に近い色のオーガンディ―やジョーゼットの透けた生地、ラメが入ってけばけばしい服など、びっくりするようなものが飾られている。

「なんて下品なの」

思わずつぶやくと、秦さんは笑って

「私はあのダイヤモンドをちりばめたようなブルーのドレスが良いな、星さんはあのショッキングピンクが似合うんじゃない」、などと言い、

他の店にぶら下がっているアクセサリを指さしながら、ふざけ合った。

細川さんは呆れたような顔をしていたが、材料を売っている店に入っ  
て行き、目立つ色のリボンや金ぴかのモール、おもちゃのようなボタン  
や私なら絶対に選ばないような光る生地などを何種類も買った。

秦さんはさんざん冗談を言いながら笑っていたが、舞台に立つところ  
いうものが映えるのよ、と真顔になって言った。別の所でも更に見慣れ  
ない木工品、材料などをたくさん買い込み手分けして電車で劇団まで持  
ち帰った。

八月の暑い日々、私は来る日も来る日も胡粉をこねていた。細川家の  
台所を借りてブリキの洗面器でお湯を沸かし、それに、にかわを入れて  
煮溶かす。火から下ろし胡粉を少しずつ入れて煉っていく。

人形の顔や手に塗るのだが、煉れば煉るほどきめが細かくなり艶が出  
るそう。それを夏の太陽に照らされて蒸し風呂のようになっていているプ  
レハブの作業場に持って行って煉る。暑くてたまらず、秦さんと一緒に

隣の鉄道の高架橋の下に避難して煉る。三時間も四時間も煉り続ける。

二人とも胡粉で手が真っ白で仕方なく肩や袖で汗を拭きながら煉る。

「婚約者がいてね、益田キートンにそっくりなのよ」

「おじいさんのの？ 随分渋いね」

「いやだあ、若いけどそっくりなのよ。お見合いをして付き合い始めたんだけど、とぼけていて、それがわざとじゃなくって、けっこう気に入っているのよ」

「へー、上手くいつているんだ……。私ね、大学時代から付き合い合っていた彼と別れちゃった」

時折ゴーっと、頭上を電車が通り過ぎていく。空気が揺れるほど暑い日の午後、私達は高架橋の脚のコンクリートの出っ張りに腰掛けて、胡粉を練りながら喋る。

「どうして」

「うん、私の家は華僑なのよ。フィリピンに家があるのだけど母は日本人で一人っ子なのよ。それで私は祖父母の家にいるの。ほとんど日本で育ったのだけど、いざ結婚となると彼の両親は反対だった」

「そんなのひどいじゃない。彼は知っていたのでしょ華僑だった」

「うん、付き合っている時には何の問題もなかったのだけどね。でも、それだけじゃないかもしれない。卒業して彼は家電メーカーに就職してしまっただけ。もう演劇にはあまり興味が無くなったみたいだし、私にもね」。

秦さんは眩しそうに笑ってその話を終了させた。中高一貫のカトリック系お嬢様学校を出て大学の英文科に入ったと言っていた。学部は違うけど一年の時たまたま二人とも演劇部に入って、それからずっと恋人同士だったそうだ。

「就職をしたからって、そんなに簡単に家族に言われたことを納得してしまうなんてひどいじゃないの」私は腹が立ってきたが、秦さんはこれ以上その話を続けるつもりはないらしく、しばらく黙っていたが、話題を変えて

「美紀さんの代わりに旅班に入らないかって言われているのだけど、まだふんぎりがつかないのよ。東京班は面白いしね。いずれは自立しなければならぬのだけどね」と明るく言った。

「自立すると言っても、お給料っていくらくらいなの」

「私は八万くらい、旅班の人たちはもう少し多く貰っているかもしれないけど、旅に出ている暇はいつもアルバイトをしないとやっていけないのよ」

「じゃあ、西夫妻は深刻ね、家族も増えるのに」

美紀さんは私より年下でまだ二十歳を少し出ただけのはずだ。みんなそれぞれ問題を抱えているのに、私は何だろう、もうすぐ結婚しようと言うのに、普段着でやってきて、机の前に座るわけでもなく、クラブ活動のような気分を毎日過ごしている。

胡粉が煉りあがり事務室に持って行くと、もう人形の顔型が出来ていた。

細川さんは早速私達が持ってきた胡粉を顔型に塗り始めた。何日前に見たときには粘土で首から上をつくり、型をとるために石膏で覆われていたのに、すっかり顔型になっていて粘土と石膏の残骸が片隅においてある。まるで手品でも使ったみたいなのに、あつという間に出来てしまったような気がして細川さんに

「顔型はどのようにつくったのですか」と聞いたら、細川さんは節くれだった細長い指で胡粉を塗る作業を続けながら、ちよつとこちらを見て笑っただけで、取り合ってくれなかった。横から秦さんが

「教えてもちよつと出来るようになるよみんな辞めちゃうんですよね」といたずらっぽく笑った。

細川さんは何層にも胡粉を塗ってしまうと、乾くまでこのままにするのだと自室に行ってしまった。

彼がいなくなると、秦さんが部屋のわきに立てかけてある分厚いボール紙を持ってきて

「これを手で小さく千切って糊をうすく煮溶かしたお湯につけて柔らかくしてから顔型を作るのよ」細川さんの代わりに繕うように言った。

「えーえ、この人形の顔はボール紙で出来ているの！」

もう薄暗くなってきたので電球を点けたが、私達は急速に親しくなつて、昼間高架橋の下でお喋りをした余韻がまだ残っているせいか離れがたく、机の上に無残に置かれている粘土をこね始めた。興に乗りペたペたと置きかためながら裸婦像を作るとなんだか満足して外に出た。大通りに出るまでの間、街灯はついているもののまだ空はうっすらと明るく、

両側の、門構えの立派な家々からは夕餉の気配が漂っていた。

翌朝、行ってみたら裸婦の乳に小さく丸めた乳首がチョンチョンと乗っていた。細川さんが見つけたのかしら？

「あのお、覚えています？粘土でつくった裸婦の胸に乳首がチョンチョンとついていたのを」、私が思い出して言ってみたが、

「そんなことありました？ すっかり忘れていますわ」と秦さんは残念そうに言った。

「人形の作り方、秦さんに教わったのですよ」、と言うと、

「あーそうでしたか。私、胡粉を練ったり人形を仕上げたりするのがとても好きでした。細川さんは分かりやすい人形しか作らなかつたでしょう。勸善懲悪が口癖で、人形も一目で善人と悪人がわかつてしまうような：：。私はもつと芸術的な深いものを作りたいなんて、試したりしたんですよ」

「へー、で、細川さんは何て？」

「こんなのためだって、観客は小学生ですものね、ふふっ、孫なんか見ていると確かにそうですわ」

「小学生は勸善懲悪ですよね、秦さんはもうお孫さんもいらっしやるのでしたね、彼は正しかったんですね」

私の結婚話は着々と進行していた。木下さんは陶器会社に勤めていて会社の帰りに背広姿の彼とデートをした時、私が人形を作った話をしたら脇に置いた黒いカバンの中から陶器の輸入人形のカタログを取り出して見せてくれた。フランス人形のようなものや馬に乗った騎士など、エキゾチックで綺麗だったが、彼はいつもこんなものを持ち歩いているのかなあと思ったら、私の考えに応えるように

「僕は普段営業の仕事をしているから、扱っている商品のカタログを持って小売店を回るんだよ」、と言ったので、ひよろつと背の高い木下さんが炎天下に背広を着て黒いカバンを持って道を歩いている姿を想像したが、あまり悲壮感はなくどこかユーモラスな感じがした。

私も劇団では、月給を三千円しか貰っていないこと、今はテレビ局で人形劇の仕事を主にしていること、一回だけ幼稚園で公演をした事などを話し、結婚してもそれを続けたいと言ったら、木下さんは

「鳴海さんが言っていたよ。星さんのお嬢さんは、御趣味で人形劇を始められたけど、きっと社会奉仕のつもりなのだろうって」

鳴海さんというのは私達の仲人で、母が友人に紹介された人で、木下さんも親戚の知人とかで、お互いの家族共にそれまでは面識がなかったはずだ。婚約したあとから人形劇団には通い始めたのだが、鳴海さんにはだれが話したのだろうか。

一応商業演劇なので社会奉仕ではないのだと言うと、木下さんは、人形劇にあまり関心が無いらしく、結婚しても続けたいものがあつたら続ければいいじゃないの、と言った。

公共の会館で結婚式をすることになり、日取りも来春に決まった。

結婚したら木下家で一緒に住むことになり、日曜日には彼の家に行くことが多くなった。

彼の母親の料理は全般に甘い。里芋や蓮根、人参などを煮染めたものは美味しかったが、まるでお菓子を食べているみたいだ。食後はお喋りをしながらデザートを食べた。我家では父が九州男児で黙って晩酌をするせいか、誰も食事中は話さなかったので違いが面白かった。

二階の彼とお姉さんが使っていた部屋を新居に充てることになり、改築に向けての作業が始まった。

少ないスペースに思いの丈を詰めていく作業は楽しかった。木下さんは自己主張の少ない人で、机や家具など、彼の母親と相談しながら使えるものと処分するものを決めていった。

ただ、代々使っているという特注の机だけは大きく、場所をとりすぎる。だが捨てるには抵抗があるようで彼の母親は悩んだ末におおずと「千明さんの行っている人形劇団で使ってもらえないかしら」と言った。

私は物の充満したプレハブを思い浮かべながら、聞いてみます、と言った。

劇団の仕事は面白かった。

テレビの理科の時間に出演した時のクロマティブルーは、まるで魔法だった。

ロケで植物園に行き、人形を操って植物を指さしながら収録してくる。その後スタジオでクロマティブルーの布を背景に女優が立って台詞を言う。同時に人形役の音声も入る。すると上手い具合に収録してきた

風景の中で、お姉さん役の女優と人形が、植物を見たり触ったりしながら話しているように映るのだ。

テレビ局の中を歩いていると、テレビで見慣れた人がそこかしこにいて、ワクワクした。

結婚準備を進める木下さんの家ではいつでも机を取りに来るように言っている。細川さんが、せっかくだから使わせてもらおうと言ってくれたので、旅班が公演の合間に戻って来た時に取りに行くことになった。

メンバーはその日劇団にいた、長髪にパーマをかけたキリストのような羽田さん、東京班だったが美紀さんの代わりに旅班に入った紅顔の美少年ストレートでロングヘヤーの山田君と旅班でヘビースモーカーの町田さん、それに私の四人。

住宅街にある家に着いて車を止めると道をふさいでしまうのだが、旅班の人は手慣れたもので、きびきびと木下さんのお母さんに机のある場所を聞き、寸暇を惜しんで運び出した。その間、彼女はおろおろと挨拶の言葉を途中で止め、あらかじめ準備していたお茶やお菓子をどうにか食べてもらおうと声をかけ続けていた。

自宅で開業医をしている彼の父親は時々覗いていたが、私を捕まえて、「あの人たちは何なのだ、あの長い髪は何なのだ」と真剣な顔で聞かれた。そんなことを言われても……。

私は言葉に窮しながらも、劇団の方たちです、と小声で言った。劇団に入った当時はいろいろなことが珍しかったが、今では男性の長い髪にも汚い服装にもなんの違和感もなく、この人は何を言っているのだろう、と思った。

劇団の人たちは机を積み込むと車を広い所に移動させ、改めて挨拶をして、彼のお母さんが当初心づもりをしていた通りに、お茶やお菓子を御馳走になり、嬉しそうな顔をしてお礼の言葉を述べていた。